

## 上下身

ゴータムの三賢人、  
お碗に乗って海を漂う。  
彼らのお碗が丈夫なら、  
わたしの話も長くなる。

——イギリスのわらべうた<sup>i</sup>

人間の肉体は明らかに一つの全体である、(ナイフでそれを切り割くこともできるけれども、) 背後は頭部から尾閥まで一本の脊椎で、前は胸から“丹田”まで一枚の腹の皮、中間には開ける処がない。ところが吾が郷(他の所の市民は聞いても自分らのことかと疑うには及ばない)の賢人は必ず無理に分割して上下とする、——たぶん臍を境とするのだろう。上下はもともと方向であって、なんの悪いところもない。だが彼らはここで又大義名分の大道理を応用して、そうして上下は変って尊卑、正邪、浄不浄の別となる。上半身は体面ある紳士で、下半身は“懲らすべき”<sup>ii</sup> 下流社会である。こうした言い方は聖道に合っている以上、当然間違っているはずがない。ただ実行するとなるといささか難しい。言うまでもないが胴斬をしたがる“関大爺の大刀”が上下に分けてしまうと、どうしても一命を台無しにしてしまうから、もちろん断乎不可である。たといやるべき範囲内に少々割裂を加えるとしても、最も端正な道学者でさえ決して承知しない。ふだん沐浴する時、(幸い賢人たちにはこれはそれほど多くない、) 手拭い二本、洗面器二つ、水二桶を用意しなければならない。二つの階級を別けて洗うのであるが、少し不注意だと上に連なるのでなければ下を犯すことになって、尊卑の順序を乱し、深く徳化の妨げとなる。又高椅子に坐って居睡りをし、もんどり打ってころげ落ちるような場合は、さらに本末転倒で、大いに吉兆でないことになる。われわれ愚人から見ると、これは実に自分から面倒を起すわけで、一つの身体が起ち上ったり昏倒したり、あるいはとんぼを切ったりしても、要するに一つの身体であって、決して豚肉のようにヒレやバラ肉などの区別があって、貴賤不同の価値が決っているわけのものではない。わが郷の賢人がすることは、聖道に合っているとは言うけれども、それはやはり古代蛮風の遺留ではないか。

生活をバラバラの断片に分け、わずかにその中のいくつかだけを選び取り、気に入らない部分を捨て去ろうとする人たちがいる。こうしたやり方は刀を抽いて水を断ち、剣を揮って雲を斬ると言える。生活にはたいてい飲食、恋愛、出産、仕事、老死などいくつもの事が含まれるが、結びついて一つになっているものであって、そこから勝手に一二を選び取ることができるものではない。ある人は長生不死を希み、ある人は生存禁欲を主張し、ある人は専ら飲食のために仕事をし、ある人は仕事のために飲食する。これらはみないくらか臍できっちり引き切り、底板に釘付けして、上半身だけを残そうとするのに似ている。比較的ものが解っているのにまじめすぎる友人は全般を承認しながらその等級を分ける。たとえば道を行くのは上等だが睡眠は下等だとか、飯を食うのは上等だが飲酒喫茶は下等だとするのはそれである。わたしは決して人間は終日睡っ

たりあるいは茶や酒で飯の代りにできるなどとは思わない。けれども、睡眠あるいは飲酒喫茶が軽蔑してよい事ではないと思う。それらもやはり生活の一部であるからだ。百年余り前、日本に茶道に精通している芸術家が出て、ある時旅に出た。宿場に着くたびに必ず茶道具を取り出して、悠然と茶を点でて自分で飲む。誰かが、旅に出てまでそんなにすることはないでしょうと諫めると、彼の答がよかった。“旅がまさか生活でないということはありますまい”と。このように考える人こそほんとうにその生活を尊重し楽しむのである。ペイター (W. Pater) は、われわれの生活の目的は経験の結果ではなくて経験そのものであると言った。まじめな人々はただ一つの事だけをまじめな生活とし、そのほかのたとえば已むを得ない悪い癖でもなければ、つまるところあってもなくてもよい<sup>つけたし</sup>附属の物としてしまう。程度のちがいこそあれ、これはわが郷の賢人がただ上半身(実は、細かく言う必要はないが、正に正反対なのだ、)のみを尊重するのとまさに同じ種類に属する。

ゴータム (Gotham) 地方の物語はおそらく話せば長いのであろう。これはただその中の一二節にすぎない。(民国十四年二月)

※初出：1925年2月2日『語絲』第12期

i この歌はマザー・グースに収録される。



1826年には James Kirke Paulding によって “The merry tales of the three wise men of Gotham” という小説も作られた。上の絵は 1839 年 Harper & Brothers 版の内扉絵である。

ii 周作人の松枝茂夫氏宛の手紙に「元教員の某、今は反動政府の役人が言った言葉で、“懲らさなければならぬもの”との意だとある。小川利康編『周作人・松枝茂夫往来書簡・戦前篇 1』